

# 戦争が駆け足でやって来る！ (その4)

## 自衛隊員の命だけでなく、日本国内も標的とされる！

国会で論議されている安保法制の確信点は二つある。一つは他国の戦争に日本も参加する「集団的自衛権の行使」。二つは戦争に直接は加わらず他国の戦闘を遠巻きに手助けする「後方支援」。その対象国は米国である。米国はアフガニスタンやイラクでの戦争で多数の米兵が犠牲となり、財政的にも負担がかさんだ。そのため同盟国である日本に、戦争の肩代わりを要望し、安倍は「積極的に答えようとしている」。そして安倍は「日米同盟の強化で抑止力が高まり、日本が攻撃される可能性は一層なくなる」「米国の戦争に巻き込まれることは絶対にない」と答弁している。はたしてそうだろうか？

米国の戦争に日本が参戦すれば、限定的な武力行使（後方支援）だとしても相手国には敵対行為となり、当然攻撃対象となる。相手国の能力次第では、自衛隊だけでなく日本本土も狙われる。米軍基地や原発などが標的となる。または相手は正規軍ではなく、テロリストによる自爆テロが日本国内で起こされる恐れも出てくる。

まさに「平和安全法制整備法案」の「平和」とは国民の目をあざむく姑息な名称であり、その内容は「戦争法案」そのものである。日本が戦後70年「海外で武力行使せず、平和を守る国」であったことの終わりを迎えようとしている。

## 市民の殺戮…それが戦争、自衛隊員を送り出していいのか？

『米軍は一定空爆を行った後に、「人道措置」だと言ってチェックポイントを開放して女性と14歳以下の男の子は街の外に出ていいと伝えた。何故14歳より上の男性は一律にダメかという、テロリストの可能性があるからだ。一定の年齢の男性であればテロリストかもしれないので殺すと判断した。お兄さんやお父さんを残して自分たちだけが逃げる事ができなくて多くが街に戻ってきた。街の中に女性や子供たちがたくさんいるのを承知で、空爆を再開した。地上戦になり、次々と市民を殺害し街中に遺体があふれた。殺す人間がいなくなると、犬猫を殺した。犬猫がいなくなると、遺体に名前を付けて狙撃ごっこをして遊んだ。』

(イラク・ファルージャの帰還兵士の話…「自然と人間」誌より)

帰還兵の多くは、米国に戻っても正常な生活ができずに苦しんでいる。そういう前線に、米軍といっしょに自衛隊員も送り出そうとしている。